

美貌の王立図書館の副館長は  
健康のためにドラゴンを飼うことにして  
いた

# ✿ Characters ✿



ロイ  
ドラゴン専門店（竜のヤドリギ）の店主。  
ドラゴンを溺愛するルークに対して、小馬鹿にしているような様子を見せる。



## 目次

### プロローグ

第一章 図書館のいとし子

第二章 ドラゴンの卵

第三章 龍のヤドリギ

97

46

12

7

第四章 ルーク・セクストンの秘密

128

第五章 アルドレイク王国の冬

162

第六章 古代遺跡の冒険

205

第七章 ルークの宝石

エピローグ

296

## プロローグ 王立図書館の副館長による早朝のドラゴン散歩が人々を驚かせた件について

王立図書館の副館長がドラゴンの定期飼育を始めたとき、王都の一部は大いにざわついた。  
最初に気づいたのは配達人たち、それにコーヒースタンドの亭主だった。

アルドレイク王国の王立図書館は大学街の中心にあり、街路では早朝から、ミルクやパン、新聞の配達人が朝寝坊の教授や学生の目を覚まさせようとしている。コーヒースタンドは大学街の中央と端、つまり図書館と学寮の前に一軒ずつあり、そのどちらの店の亭主も、かの人を目撃した。  
副館長は背筋をまっすぐ伸ばしたまま、まだ学生も教授もない街路をぐるりと回ると、図書館の通用門へ戻つていった。ひとりの配達人はコーヒースタンドに駆け寄り、黒髪を背中に垂らした副館長のうしろ姿を目で追いながら、亭主に話しかけた。

「ちょ、ちょっと。あの、あれ……あそこにいるの、ルークさんですかね？」  
亭主は小声で言い返した。

「そんな馬鹿な。あのルークさんがこんな時間に図書館の外へ出でてくるはずがない  
「でもそこ通つたじやないですか！ それに見て、あれ」  
配達人は通用門へ入つていく副館長の頭上を指さした。

「ルークさんの頭の上を飛んでる生き物！ ドラゴンよ！」

「……ってことはまさか……と、亭主は声を震わせる。

「ルークさんは〈竜のヤドリギ〉に行つたのか！」

〈竜のヤドリギ〉は一年前、王都の胡桃通りのはずれに開店したドラゴン専門店だ。以来、アルド

レイク王国の貴族階級や上級官吏かんりのあいだではドラゴンを飼うのが大流行している。紳士淑女が革紐でつないだドラゴンを肩にとまらせたり、頭上でぱたぱたと羽ばたかせたりしながら大通りや公園を散歩する光景は、いまやそこまで珍しいものではない。

しかし、大学街にドラゴンを連れてくる者はいなかつた。しかもそれが王立図書館の副館長、ルーク・セクストンとなると——

「まさか、ルークさんがドラゴンを飼いはじめるとは！」

「図書館の妖精とまでいわれるお方が、ドラゴンの散歩のために外に出た？」

「どういう風の吹き回しで？」

配達人とコーヒースタンドの亭主は息の合った感想をつぶやき、顔を見合させて苦笑いした。そこのころにはもう、王立図書館の副館長ルーク・セクストンは図書館の重厚な建物の中に消えてしまっていた。

ドラゴンはアルドレイク王国に古来より生息する、トカゲに似た生き物である。生き物と言つてはいるが、実際は人や鳥や獣の類ではない、精靈族の一種だ。形はトカゲに似ているが体は温かく、

翼を広げて小鳥のように空を飛ぶ。成長しても小型の犬か普通サイズの猫くらいの大きさで、鳥のようにさえぎることもないし、昔話の巨大な竜のように火を噴くこともない。

ドラゴンはアルドレイク王国の象徴でもある。主たる生息地は湖をかこむ王領の森といわれ、ここでは捕獲は禁止されているが、王家は臣民がドラゴンを飼うことを禁じてはいない。翼をもつ存在だから、実際は森の外にもかなり多く生息していると思われる。王領の森ですら人間の前に姿をあらわすことはまれだが、気に入つた場所や人間には懐くとも言われている。実際に、田舎ではたまに農家に住みついている個体がいて、その場合は幸運のしとして大事に飼われていた。

ペットとして飼われているドラゴンには、新鮮な卵の殻を毎日最低一個は与えなくてはならない。朝露が好物だから、飼い主に懐かせようと思つたら、晴れた日の朝は早起きして外を散歩させ、朝露を舐めさせるのも忘れてはならない。

ドラゴンの体色は赤、青、黄色、緑、黒とさまざままで、斑や縞柄といった模様がある個体もいる。時々、珪砂けいしゃや鉱物の結晶を与えると体色がきれいになる。

これらは〈竜のヤドリギ〉が配布する『ドラゴン飼育マニュアル』に書かれていることだ。王都でドラゴンをペットにしたければこの店に行くしかない。

ただし、この店からドラゴンを連れ帰つて散歩させている人々は、ドラゴンを所有しているわけではなかつた。〈竜のヤドリギ〉の店主はドラゴンを売らないのである。ドラゴンは精靈族の一種、本来なら森や湖のような自然を好む種族だから、王都の人間には売ることはできない、と言うのだ。

そのかわり〈竜のヤドリギ〉ではドラゴンを月単位で貸し出している。定期飼育権サブスクリプションの料金は安い

とは言えず、ドラゴンに与えるために、クリーム色をした特別な鶏卵の定期配達も同時に契約させられることになり、庶民はややためらう値段になる。しかし貴族が社交に費やす金額にくらべればたいしたことはなく、上級官吏のふところが痛むほどでもない。

結果として〈竜のヤドリギ〉は大繁盛していた。流行が流行を呼んでいるわけである。

だからって、王立図書館の副館長、ルーク・セクストンがドラゴンをサブスクしたつて？

それはあまりにも驚くべきことで、コーヒースタンドの亭主や配達人たちは黙つていられなかつた。一番にコーヒーを買に来た学生や、新聞を受け取りに外へ出た教授に彼らはこの一大事件を話し、ニュースはあつという間に大学街一帯に広まつた。王立図書館には王宮の官吏も頻繁に出入りする。そのためこの話題はその日のうちに王宮にも届き、一部の人々をざわめかせた。

それは、毎日副館長に接している図書館職員たちも例外ではなかつた。

「副館長、どうしてドラゴンを飼うことにしたんですか？ 散歩とか大変じゃないですか？」

好奇心を抑えきれなかつた職員がついに問いかけると、ドラゴンを肩に執務室へ入ろうとしていた副館長はかすかに眉をあげた。

「健康のためです」

意外な答えにたずねた職員は思わず口を開け、同じ言葉を繰り返した。

「健康のため？」

「館長に指摘されたのです。私は図書館に引きこもりすぎで、それは健康に悪いと」

副館長の言葉は石の回廊に冷たく響きわたり、執務室のドアはいつもよりやや大きい音を立てて

閉じた。

外に残された職員たちは思わず顔を見合わせた。

「引きこもり？ 館長と今度はどんな喧嘩を——」

「しつ」

「聞かぬが花だぞ」

職員たちの声は自然に小さくなつた。王立図書館の館長にしてアルドレイク王国第七王子のラッセルと、副館長のルーク・セクストンの関係にあることは、彼らには周知の事実だつた。

## 1 誰が見ても美しい男、ルーク・セクストン

アルドレイク王国の王立図書館は歴史のある古めかしい建築物である。王都にある王宮や貴族の邸宅のような華麗さはみじんもないが、見る目のある者にはすぐにわかる、謙虚な美しさをたたえている。

その王立図書館の副館長であるルーク・セクストンは、誰だろうとひと目でこの上なく美しいと思ふ男だった。

すらりとして均整のとれた肢体が図書館の中庭を歩くと、誰もが吸い寄せられるように彼を見てしまう。遠目にも美のオーラが感じられる背中には絹糸のような黒髪が流れ、きめ細やかな肌は内側から光を放っているようだ。

たいていの場合、桜色の唇はきりりと結ばれていて、青い月夜の色をした眸はここにない何かに集中している。並みの人間なら「ぼうつとしている」と思われるそうな場面であっても、ルークの場合は深遠な物事について思索をめぐらせてはいるにちがいないと思わされるのだ。そして職員や知己

が声をかけると、ルークはハッとしたように振り向いて相手をみつめる。長いまつ毛の影からは人を撃ち抜くような色氣があふれ出ている。

といつても、本人には相手をそんな気持ちにさせてはいる自覚はない。副館長と話した人間は秒で理解するのだが、ルークは人間の外見にほとんど興味がなかった。自分がその容姿ゆえに注目されることにも無頓着である。図書館の職員たちは、そんなルークを折々に鑑賞するのを、勤務中のひそかな楽しみとしていた。

しかし今日、図書館の中庭を横切つていくルークは、いつものように遠くの何かに集中している様子ではなかつた。その注意は自分の斜め上を羽ばたくドラゴンに向けられている。

まだ育ちきっていないドラゴンのようで、その胴体はルークの手のひらより少し長いくらい。胴から尖った尻尾までは濃い青色で、翼の表面は空色、裏側は純白で、その中に稻妻のような黄色の筋が走っている。

ドラゴンがルークの腕めがけて舞い降りてきたので、彼はその場に立ち止まつた。ドラゴンをみつめるルークの脣にはうつとりした笑みが浮かんでいる。

「リリ、朝の散歩はどうだった？ 朝露はもう十分かな？」

ささやきかける声は、図書館職員の誰ひとりとして聞いたことがないにちがいない、優しい響きを帶びている。

ドラゴンはルークの手首にちよんととまり、藍色の目で飼い主をみつめた。眸の中心には輝く白い星がある。ルークは指先でその頭をそつと撫でながら、ドラゴンと自分の両方に言い聞かせるよ

うに「そろそろ仕事をはじめなくては」と言つた。すると羽根がパツと開き、抗議するように鉤爪がルークの袖をひつかいた。

「籠に入りたくないのか？ でも仕事中は遊んでやれないんだ」

「ドラゴンは尻尾でルークの袖を叩き、いやいやをするように首を横に振つた。でもルークが「仕事中も一緒にいられるよう、執務室に籠を届けさせたんだよ」と言つたとたん、空色の翼をたたんで澄まし顔になつた。藍色の目の中で白い星がきらめく。

ルークは思わず微笑んだが、それは子供のような無邪気な笑みだつた。

「私が仕事をしているあいだ、じつとしていられるって？」ふふ、まずは執務室へ行こう

ルークが腕を動かすとドラゴンは鉤爪をゆるめてぴょんと飛び、今度はルークの肩にとまつた。そのまま執務室へと回廊を歩いていく。

空色の翼のドラゴンと副館長のうしろ姿が完全に見えなくなつたとたん、中庭や回廊のあちこちに隠れていた人々がふーっと息をついた。

「今の……見ました？」

「見ました」

「副館長×ドラゴン……なんて破壊力」

職員たちがひそひそと話しあじめる。さつきからずつと、声をあげそうになるのをこらえていたのだ。

「おれ叫んじやいそうで口を押さえてましたよ」

「ね、あのドラゴン、リリちゃんつていうんですね」

「ああ、わたしリリちゃんの爪の垢あかになりたい！」

「おれは籠の敷き藁でいいです」

「止まり木でもいい。あの鉤爪にひつかかれたい」

「え、何があつたの？ みんな大丈夫？」

「え、副館長のあの顔を見損ねたんですか？ 寿命が十年はのびたのに」

ルーク・セクストンは職員のあいだで公平な人物として知られている。物腰は柔らかで声を荒げることもめつたにない。しかし、今しがたドラゴンに向けられた無防備な笑みは、これまで誰ひとりとして見たことのないものだつた。

そのときである。興奮されやらぬ職員の背後から、よく通る声が響き渡つた。

「何があつたんだ？ そんなところに集まつて」

全員がハッとしたようにそちらを向く。

「あ、館長！」

「おはようございます」

「おはよう」

職員たちの背後で腕を組んでいるのは館長のラッセル。蜜色の髪に琥珀色の目をした王家の末の王子である。三ヶ月前、前館長が高齢と病弱を理由に退いたあと王命で館長に就任した。ラッセルは堂々たる体躯の美丈夫で、細身ですらりとした美貌のルークとは対照的な外見である。

学生時代から剣技に秀でていることで知られ、騎士にもひけをとらないと言っていた。王家の末子に生まれなければ、今ごろは騎士団で実力を發揮していたことだろう。

しかし、現在のアルドレイク王国では、王立図書館の館長は王家の末の王子の役職とされている。有能無能にかかわらず、歴代館長は末の王子が務めると法で定めているのだ。

ちなみに、ルーク・セクストンが副館長となつたのも、ラッセルと同じ三ヶ月前のことである。ルークは前副館長の補佐を務めており、前館長と同時に退職した前副館長のあとを引き継いだのだった。

「おはようございます。その、副館長が……あ」

副館長と聞いたとたんラッセルの声は少し低くなつた。うつかりルークの名をもらしかけた職員がハツとして口をつぐむ。

「なんだ？ ルークがどうした？」

ラッセルは怪訝な顔をした。

「あ、いえ、その……なんでもありません」

「何を言つて、ルークが何かやつたのか？ なんだ、そのぼうとした顔は」

「これはその……館長もあれを見たらぼうっとしますよ！」

「だからルークに何があつたんだ」

思わず声を大きくした職員にラッセルは置みかける。職員は不安になつた。副館長が執務室にペットのドラゴンを連れこんだと聞いたら、館長はどう思うだろう？

図書館内部に動物を連れてくるのは禁止されているが、職員が働くバックヤードは、見守りの必要な赤子や動物を同伴することは許されていた。書庫など、連れていけない場所はあるものの、副館長の執務室はどうなのだろう——？

「副館長はドラゴンと朝の散歩をしていました！」

「ドラゴン？」

思い切つて答えた職員にラッセルは驚いた顔を見せた。それを皮切りに、他の職員たちも次々に声をあげはじめる。

「そうなんです、〈竜のヤドリギ〉のサブスクドラゴンです！」

「名前はリリちゃんとです」

「副館長、ドラゴンに微笑んでいたんです。そ、それにドラゴンを撫でてました」

「可愛くて神々しくてお腹いっぱいな感じで」

「館長も見たらよかつたのに！」

「わかつた、わかつた——静かに」

ラッセルは手をふつて職員たちをしずめた。

「それでルークはどこに？」

「あ、その……執務室へ行きました」

「ドラゴンを連れて？」

「あ、はあ、たぶん……」

「わかった。おまえたち、仕事しろよ」

職員たちは声をそろえて「ハイ！」と答え、ラッセルはルークと同じ方向へ歩いていった。職員たちはラッセルの蜜色の髪が見えなくなるまで黙つて目を見交わしていたが、実は全員、心の中で同じことを思つていたのだった。

——館長と副館長、また喧嘩しませんように。

## 2 館長と副館長の関係についての一般的見解

王立図書館館長のラッセルと副館長のルークの関係は穏やかとは言えない。それどころか険悪な部類のようだと、職員たちはずつと前から察している。何しろルークはラッセルと向かい合つているときだけ、いつもの落ちついた態度を崩して、冷淡でそつけない、あるいは不機嫌で苛立つた表情を見せるのだ。

つい先日も、ラッセルとルークは中庭を囲む回廊で二歩の距離で向かい合つていた。石の壁の陰には職員が隠れ、ハラハラしながら成り行きを見守つていた。

「先月も申し上げましたが、御前会議に出席するのは館長おひとりで十分です。副館長の私が行く必要はありません」

「先月は改修工事の入札がかぶつたから欠席もやむなしと言つただけだ。今月は何もないじやな

いか」

「資料はさきほどお渡しました。館長は報告に付き添いが必要なんですか？」

「前の副館長は御前会議に毎回出席していたと聞いています」

ラッセルは平然とした顔で言つたが、ルークは眉を動かしもしなかつた。

「それは前館長が高齢で、ご病気のことが多かつたからです」

「一人で出席していたこともある。議事録を調べた」

「まさかと思いますが、決裁書類のサインもせず書庫にこもつっていたのはそのためですか？」

ルークの眸は珍しい色をしている。たとえるなら満月の夜の色、青みがかった水晶を透かしてみつめる闇の色である。そんな眸にみつめられ、桜色の唇で甘い言葉をささやかれたあかつきには、誰でも彼の思うままになるにちがいない。ルークの美貌は初対面の人間にそう思わせるようななぐいのものだつた。しかしラッセルを前にすると、それは逆の意味で危険なものとなる。

とげとげしい口調に加え、凍えそうな冷たさを帯びたルークの眸は凶器さながらだ。物陰にいるにもかかわらず職員は首をすくめたが、館長のラッセルはひるまなかつた。

「他の用事のついでだ。それに決裁などすぐ終わる」

間髪容れずルークは答えた。

「ではこの件は決裁が終わつてからにしましよう」

「待て」

ラッセルは話を終わらせまいとするように、ルークに半歩近づいた。

「御前会議だけじゃない。副館長は……副館長補佐の時代から、王立図書館を出ることがめったにないと聞いた。なぜだ？ 外に出たくない理由でもあるのか？」

「いいえ？ 必要性を感じないだけです。住まいは図書館の敷地につながっていますし、食事も図

書館ですませられますので」

「まるで引きこもりじやないか。運動不足は健康に悪いぞ」

「私の健康について、館長に心配してもらうには及びません」

きつぱりとそう告げて、ルークはさつときびすを返した。ラッセルは琥珀色の目に焦りを浮かべて引き留めようと腕を伸ばしかけたが、黒髪に触れる寸前にその手を下ろした。

ルークの背中が回廊の奥へ消えると、中庭には安堵のため息がもれた。館長のラッセルではなく、物陰で息を殺して見守っていた職員たちのため息である。ラッセルはというと、その場に突っ立つたまま腕を組み、ルークがいなくなつた回廊の奥をみつめて小声でぼやいている。

「……まつたく、副館長はつれないな」

「ちがうアプローチを試した方がいいんじやないか」

そのぼやきに答えるように、ひとりの紳士が悠々とした足取りで中庭にあらわれて、残念そうな目つきでラッセルを見やつた。

「ハーバート！ どこから聞いていたんだ」

男はハーバート・ローレンス。何よりも読書を愛し、社交行事もすっぽかしては朝から晩まで図

書館で本を読んでいることで有名な貴族である。たまたま読書の息抜きに中庭へ出てきて、ラッセルとルークの対決を目撃したのだ。宮廷では変わり者と思われているが、王と王妃の昔からの友人でもあり、ラッセルにとっては叔父の<sup>おじ</sup>ような存在だった。

「学生時代からルーク・セクストンはおまえに対してそんな調子だそうだが、本当なのか？」

ハーバートは呑気な口調でたずね、ラッセルは顔をしかめた。

「その話、どこで聞いた？」

「おまえの学友が飲み屋で話していた」

「まつたく、あいつら……」

ラッセルは王家の第七王子で、フルネームは「ラッセル・S・ワインスレット・アルドレイク」という長たらしいものだ。とはいっても、末子だからよほどのことでもないかぎり王位継承とは無縁だと、幼いころから自覚している。それもあってか、身分を鼻にかけないおおらかさと気さくな性格ゆえに、宫廷貴族から廄番<sup>うあはん</sup>まで幅広く友人知人がいた。ことに大学は身分のちがいを超えて学問や交友にいそしむ場所でもあり、ラッセルは良い意味（剣の腕前）でも悪い意味（悪友との大騒ぎ）でも目立ちながら学業をおさめた。

一方、ルーク・セクストンはラッセルより二歳年上である。ハーバートが学友から聞き出した通り、ラッセルに面と向かったときのルークの冷淡な口調は、学生時代から続いているものだ。

ちなみに、ルークとの初対面、これはラッセルにとって、あまり思い出したくない出来事だった。いや、正確には思い出したくないのではなく、思い出すのはいろいろな意味で避けた方がいいと、

ラッセル自身が思つてゐるせいだが――

しかし、ハーバートはラッセルの胸中をよぎつた思いなど知つたことではなかつた。  
「たしかに、大学時代のおまえを知つてゐるのなら、つきあうには軽薄すぎると思うのも無理はないか」

ラッセルは焦つた声で言い返した。

「ハーバート、誤解を生む表現はやめてくれないか。俺はルークにつきあつてくれなんて言つたことはない。ただ俺は、館長と副館長という役職にふさわしい接し方をしようとしているだけなんだ。それもたいしたことじやない、御前会議に同伴する程度の話だ」

「同伴って言葉はいやらしいな」

「やめてくれよ。たしかにルークは初対面の印象を引きずつてゐるかも知れないが、お互いもう学生でもない」

「いつたい初対面で何をしたんだ、ラッセル？」

「それはその……」

ラッセルは口ごもつた。あの日ラッセルと一緒にいた学友もすべてを知つてゐるわけではなく、第一、今さら蒸し返すことではなかつた。これはラッセルの名誉ではなく、ルークの名誉のためだ。「なんだ？ そんな顔をするなんて、さては酔いつぶれてあの美人の膝にゲロを吐きでもしたのか？」

ハーバートの言つたことはまつたく当たつていなかつたが、ラッセルはしぶしぶうなずいた。

「そんなどころだ」

「軽蔑されて当然だな」

「あのな、俺のせいじやない。俺も巻きこまれたんだ」

「ほう？」

「とにかく俺がルークに迷惑をかけたのはあのときだけだ。あのときはきちんと謝罪したし、ルークも気にしていないと言つていたし、大学を卒業したあと、ルークが副館長の補佐だと知つてからは特に気をつけてきたつもり……なんだが……」

「ほう……」

ハーバートの眸がキラッと光つた。

「だからせめて職務のときくらいは横にいたいのに、ちつとも振り向いてくれないと？」

「そんなんじやない」

思わず強くそう言つてから、ラッセルはあわてて声を低くした。

「そんなことじやないって！ 俺はルークとその……感じよく話をしたいと思つてゐるんだ。なのにすぐ――おい、ハーバート、面白がつてるな？ これ以上余計なことを言うなら館長権限で出禁にするぞ」

「わかつたわかつた。まあ、がんばるといい」

ハーバートはクスクス笑つてラッセルの肩を叩き、ラッセルは顔をしかめながらその手を払つた。子供のころから自分を知つてゐる年長の友人とは厄介なものである。ともすれば自分の心を見透か

すようなことを言う。



さて、そうやつてラッセルがハーバートにからかわれていたとき、ルークが何をしていたかといえば――

「十五、十六、十七、十八……」

副館長の執務室に閉じこもり、デスクと書類棚の前を行ったり来たりしながら自分の歩数を数えていた。

「――一周が十八歩。ということは十周やそこらでは、さほど歩いたことにならないのか……」

ルークは黒髪をかき上げて物憂げな吐息をついた。

「たしかに健康に悪い」

――実はこの日、ラッセルが何気なく言つた「引きこもり」や「健康に悪い」という言葉は、当人が想像するよりもずっと強く、ルークの心に響いていたのだった。だから、ルークは思い切つて〈竜のヤドリギ〉へ出かけ、ドラゴンを連れ帰つたのである。

### 3 ドラゴンはなぜ健康にいいのか

さて、ドラゴンを肩に乗せて無事出勤を果たしたルークは、街路や中庭で人々に動搖を引き起こしたことにまったく気づかないまま、静かに執務室のドアを閉めた。

「朝早くから散歩をするのは、案外気分がいいものだね、リリ」

ささやくとドラゴンの翼の先が首筋をくすぐる。ルークは実に誇らしい気分だった。出勤時間を大幅に早め、官舎から大学街に出てぐるりと歩き、戻ってきただけのことだが、早朝のさわやかな空気と、人生初のドラゴン散歩が成功したという思いで実に達成感がある。リリと名付けたドラゴンも上機嫌だった。街路を行くときはルークの頭上をパタパタと可愛らしく羽ばたいていたし、手や肩にもおとなしく乗ってくれる。た籠の中にいた。

ルークがドラゴンショップ〈竜のヤドリギ〉からリリを連れ帰ったのは二日前の夜だった。家に連れ帰ったあとはしばらく籠から出さないようにと店主が言つたので、リリは今朝まで寝室に置いた籠の中にいた。

店主いわく「ドラゴンは慣れるまでは途中で逃げ出しますが、この籠に入れたまま二日同じ部屋で眠り、餌と水を二回やれば、普通は懐きます。飼い主のオーラを覚えますからね」とのこと。

ちなみにそのとき、細かいことが気になるルークは「普通は、とは?」と聞き返した。すると店

主は「たまにえり好みが激しいのがいるんですよ。ああ、それとか」と言つて、隅の籠に入れられた空色の羽根のドラゴンを指さした。

「籠から出したとたん逃げ出そうとするつて、三回も戻ってきたんですよ。見た目はいいけどお飼めしません」

だが、ルークは店主の声を聞いていなかつた。空色の羽根のドラゴンが籠のすきまから首を伸ばし、ルークをみつめていたからだ。

それが今ルークの肩にとまっているリリである。店主は何度も「お勧めしない」と言つたが、ルークはひと目でリリに惚れこんでしまつた。「このドラゴンがいい」と引かないルークを店主は呆れた目で見て、しまいに承知したのだつた。

「わかりました。これは札付きのドラゴンですから、サブスク中に何かあつたら必ず連絡してください」

しかし、今のところリリはなんの問題も起こしていない。今も肩にとまつたまま、ルークの仕事場を見回している。

副館長の執務室は館長室の半分以下の広さで、簡素なしつらえである。ひとつの大壁は大きな書類棚で占められ、もうひとつの大壁にある窓の前にはデスク。書類棚と向かいあつた壁には別のドアがあつて、館長の従僕が控える小部屋に続いているが、現館長のラッセルは従僕を使わず、小部屋には大きな長椅子が置いてあるだけだつた。昼寝に使つているらしいとルークは見当をつけていた。小部屋のもうひとつの大門を開ければ、いちいち廊下に出ずとも館長室へ行くことができた。鍵

はついておらず、それどころか前任者の時代はいつも開け放しだつた。しかし、ルークが副館長になつてからは一度も開けたことがない。

パタパタ。

翼の音がして、リリが肩の上から飛び立つ。あつと思つてルークが見上げると、一度天井の近くまで舞い上がつたあと、部屋をぐるりと一周してふたたびデスクへ舞い降りた。  
「鳥籠を吊るすから、そこでじつとしていなさい」とルークは言つた。

リリはデスクの上で小首をかしげた。藍色の目の中で白い星がくるりと回つた。まるで「どうして?」とたずねているようだ。

ルークは書類棚の横から脚立をひっぱり出した。

「リリだつて、館長みたいに遊び疲れたら籠で昼寝したいだろう?」

ルークは脚立にのぼり、天井から下がる鎖(本来はランプを吊り下げるためのもの)に鳥籠をぶら下げた。籠の戸には細い鎖がついているから、下から引くだけで開け閉めできる。

この籠も〈竜のヤドリギ〉から借りたものだ。サブスクの料金には日中用と睡眠用のふたつの籠のレンタル料も含まれている。今ルークが吊り下げたのは日中用の籠だ。

「ほら、おいで。この籠は昼間専用だから、真っ暗にはならないよ」

ルークは脚立に乗つたままリリを呼んだ。ドラゴンは空色の翼をパタパタさせてふたたびデスクから舞い上がつたが、見定めるように籠の周囲を飛び回るだけで、中に入ろうとはしない。

「戸は閉めないから、一度入つて」

ルークはリリの方へ腕を伸ばした。そうしながら、脚立にのぼるのもひさしぶりだと思った。去年までは副館長の補佐役として雑用に駆け回つたものだし、重い本を持って書架の梯子(はしご)を昇り降りすることもよつちゅうだった。

ところが今は一日中、執務室にこもつて計画書や報告書を作成するばかり。夕刻に仕事から解放されると、今度は書庫にこもつて読書するばかり。だからラッセルに「引きこもり」と呼ばれてしまつたにちがいないが――

「リリ、おいで！」

空色のドラゴンが飛んでくると、ルークは蕩けるような微笑みを浮かべた。

ドラゴンを飼うのは健康によい。これは〈竜のヤドリギ〉が大繁盛しているもうひとつの中である。

〈竜のヤドリギ〉の主要顧客である貴族は夜更かし朝寝坊が多く、官吏は運動不足になりがちで、どちらも不摂生と言える。しかしドラゴンを飼えば、一日一度は外に連れ出して散歩をしなくてはいけない。朝露を飲ませようと思つたら早起きも必要だ。

ドラゴンは餌を与え、散歩に連れ出し、朝露を飲ませてくれる人間を主人として懐くから、従僕にまかせているとパーティで赤恥をかくことになる。サブスクをはじめると、みな最初はしぶしぶ散歩に出る。ところが、パタパタと空を飛ぶドラゴンを撫でたりなだめたりしているうち、散歩自体が楽しくなつて、やがて運動習慣が身についてくる。

これだけでも十分健康に良さそつだが、ドラゴン飼育の副効果は他にもあつた。

ドラゴンに毎日餌をやつしていると、食が細かつた者はなぜかよく食べられるようになり、たいしょく大食していた者は逆に食事量が減つて体調がよくなつたとか、つねに不機嫌で周囲にあたりちらしていた氣難し屋が、ドラゴンを飼いはじめて性格が丸くなつたとか、引っ込み思案で人と目を合わせることもできなかつた令嬢が、ドラゴンを連れていれば社交の場でうまくふるまえるようになつたとか。これらは王國新聞にも大きく取り上げられたので、上流階級の流行になど興味を持たなかつたルークも、胡桃通りのはずれにある〈竜のヤドリギ〉を知ることになつたのだった。

「いいことづくめですが、これはドラゴンが精霊族だからでしようか？」

新聞記事では、記者は〈竜のヤドリギ〉の店主にこんな質問をしていたが、店主はあいまいに笑い返しただけである。記者はさらにこんな質問もした。

「もうひとつお聞きしたいのですが、この店のドラゴンはこちらで繁殖したのでしょうか？ 王領の森以外でドラゴンを見つけるのは大変難しいと言われていますが……」

「ああ、もちろん秘策があります。教えられませんが」

企業秘密というわけである。

〈竜のヤドリギ〉には他にも謎めいた点があつたが、リリを飼いはじめたばかりのルークはまつたく気に留めなかつた。

リリは脚立のてっぺんにいるルークのところまで来ると、おとなしく籠の中に入つていった。自分の言葉が通じているのを実感して、ルークの唇はまたほころんだ。籠の戸に頬をよせてのぞき込み、中を検分するようにつついているリリをみつめる。

「けつこう広いだろ？ 止まり木もある。昼間はリリが好きに出入りできるように、籠の戸は開けて——」

そのときだつた。続き部屋のドアが勢いよく叩かれた。

「ルーク、中にいるか？」

ルークはハッと肩を震わせたが、発せられた声は冷静だつた。

「館長、お待ちを」

「入つていいか？」

「お待ちくだ——」

声こそ冷静だつたものの、脚立を降りるときはあわてていた。ルークはよろめいて段を踏み外しそうになつた。すると、いきなりリリが籠から飛び出し、執務室に笛のような音が響いた。

ピーツ！

え？ 今のはまさかリリの鳴き声？ ドラゴンは鳴かないのではなかつたか——脚立から転がり

落ちようとしているまさにその一瞬、ルークの頭をよぎつたのはそんな考え方である。

「ルーク！」

同時に続き部屋の方で声があがつて、バタンと大きな音が響いた。そのときにはもう、ルークは脚立から足を踏み外していた。床まで転がり落ちるかと思いきや、がつしりして温もりのある何かがルークの体を支えている。笛のような音もやんでいた。太い腕がルークの背中に回されているのだ。

それが誰の腕なのかは、顔を見るまでもなくわかつた。

「か、館長？」

ラッセルがほつとした顔で「ドラゴンが鳴いたから何かあつたかと——」と言いかけたが、ルーケは最後まで聞かなかつた。

「お、おい！」

「大丈夫ですから！」

ふだんは決して出さないような声で叫びながらルークは腕を振り回した。肘がビシッとどこかに決まり、小さなうめき声とともにラッセルの腕がゆるむ。ハツとして声のする方を見ると、ルークの肘はラッセルのあごに命中していた。

「……痛つ……」

パタパタッと羽ばたきの音がして、ラッセルの頭に空色の翼がかぶさつた。

「お、おい！ まで、つつくなよ！ 僕は何も——」

蜜色の髪の中からドラゴンの首が伸びた。藍色の目の中で白い星がきらめき、翼が広がる。

まさかと思うが、リリは自分を助けようとしているのだろうか、とルークは思った。ラッセルは自分を助けようとしてくれたのだから完全に誤解である。ルークはラッセルから後ずさりながら叫んだ。

「リリ、籠に戻つて！」

「早くどけ——痛つ」

ラッセルがうめく。

「こら、俺の髪を抜くな！ 爪をひっこめろ！」

「リリ、私は大丈夫だから！ やめなさい」

今度こそドラゴンは宙に舞い上がったが、鉤爪にからまつたラッセルの髪の毛が千切れる無慈悲な音も響いた。空色の羽根がパタパタと籠の中に飛びこんでしまうと、ルークは鎖を引いて籠の戸を閉めた。

背後で大きなため息が聞こえ、ルークはゆっくりと振り向いた。

「館長、申し訳ありません。その、脚立から落ちそうになりまして」

ラッセルは腰を伸ばし、ドラゴンの鉤爪でぼさぼさになつた髪の毛を撫でつけると、コホンと咳払いをした。

「その、用があつて続き部屋を通ろうとしたらドラゴンが鳴いたから……何事もなくよかつた」「あの音ですか？ マニュアルによれば、ドラゴンは鳴かないとのことですが」

そう言いながらルークはラッセルの琥珀色の眸からそつと目線をすらした。ルーク自身にも理由がさっぱりわからないのだが、なぜかこの眸に昔から——そう、学生時代から困惑させられてきたのである。もちろんラッセルはそんなことは知らないし、ルークも知られたくなかつた。

「いや？ 仲間や飼い主に危機が迫つたときは、鳴いて警告を出すこともある」

ラッセルは答えながら無造作に両手を払う。するとリリにむしられた髪の毛がはらはらと床に落ちた。ルークはかすかに眉をあげた。

「お詳しいですね。館長もドラゴンを飼われているのですか？」

「いや、ただの知識だ。王家は昔からドラゴンと関わりが深い」

「なるほど。本当に申し訳ありませんでした。二度と館長を襲わないよう、リリに教えます」

ルークはラッセルと目を合わせないようにしながら言つた。おかげでラッセルの眸にかすかな落胆がよぎつたことにも気づかなかつた。

「ああ。よろしく頼む」

「ところで館長、ご用件はなんでしょう」

「用件？」

「私に用があつて来られたのでは？」

「ああ、そうだ。そのはずだが……」

ラッセルはまたコホン、と咳払いをした。

「悪い。度忘れした」

「そうですか。了解しました」

「思い出したら知らせる」

「はい」

「脚立、片付けようか?」

「けつこうです。自分でやれます」

「俺の方が力はある」

「この程度の脚立に苦労しているようでは、図書館の仕事は務まりません——あ」

ルーケはふと、そういえば自分もラッセルに言いたいことがあったと思い出した。

「館長」

「なんだ?」

「たしかに最近の私は不健康だったかもしれません。明らかに運動不足でした」

ラッセルの琥珀の眸がとまどつたように揺れた。

「……そ、そうか?」

「しかし今日からはリリがいます。問題は解決するでしょう。リリに朝露をあげるために散歩に出ますし、リリと遊べば運動不足も解消します」

「……なるほど」

「それで館長、私は仕事にかかりたいのですが。ご用件を思い出したらお知らせください」

頭上でカサカサッと音がした。ラッセルは上を見上げる。リリが籠の隙間から首を伸ばしている。

「……わかった。そいつも俺が邪魔らしいな」

「はい」

「肯定しなくても」

「申し訳ありません」

「いや。邪魔してすまなかつた、副館長」

ラッセルの背中が続き部屋に消えるのをルーケはまっすぐ立つたままみつめていた。ドアが閉まつたとたん、ふうーーと大きなため息が半開きの唇からもれる。細い右手がゆっくりあがり、左胸のあたりをそつと覆つた。

「ああ……まだきどきしている」

頭上の籠からコツコツと音が響いた。リリの鉤爪が底をリズミカルに叩いている。ルーケは息を吸つて吐き、リリの立てる音に耳を澄ませた。激しく脈打っていた胸がだんだん穏やかになつていいく。

図書館職員たちは館長と副館長の仲が悪いことを気にしている。しかしルーケとしては、ラッセルが嫌いなわけではなかった。ラッセルとちがい、初対面の日に起きたこともたいして気にしない。

問題はルーケの心ではなく体にあつた。ラッセルの琥珀色の眸をのぞきこむと、ルーケの心臓はなぜかドキドキ脈打つのである。おまけに、体の中心がおかしな感じで疼いて、かつと熱くなるのだ。

最初にラッセルを目撃したときからルークはこの現象に悩まされている。それはラッセルが大学へ入学した年の学寮対抗戦の最中だった。自分でも理由がわからないから、対処もできなくて困っている。

ラッセルに面と向かうたび、体の熱が心に影響するのか、ルークからは冷静な思考が失われてしまう。体の衝動を抑えた反動が出るのか、つっけんどんな受け答えをしてしまうこともあるし、喧嘩になってしまうこともある。

そんなふうになってしまふのか？ いつたい何が起きているのか？

図書館で調べてみたこともあるが、答えは見つからなかつた。

ルークは左胸にあてた手を離した。  
「龍のヤドリギ」でリリを見つける前、ルークはラッセルに「私の健康について、館長に心配してもらわには及びません」と答えた。あれはルークの本音ではなかつた。しかし本心をラッセルに告げるわけにはいかない。

——私の健康に悪いのはきみだ。  
そんなこと、言えるわけがない。

## 5 ルーク・セクストンの生き立ちについて

ところで、ドラゴンのリリを迎える前のルークの生活は、誰が見ても美しいその容姿に似合わず、華やかさのかけらもない、ひつそりして孤独なものだつた。

人によつてはこれを奇妙だと思うかもしれない。何しろルークの容貌は、高位貴族の庇護のもとで指一本動かすことのない生活をしたり、自分の思うままに他人をあやつたり、そんなことも不可能ではないものだつたからだ。

しかし、ルークの頭にそんな考えが浮かんだことは一度もなかつた。というより、ルークは自分の外見が他人にそんな効果を及ぼすと考へたことがついぞなかつたのである。それは彼のやや特殊な出生と、育つた環境の影響にちがいなかつた。

ルーク・セクストンは父親の旅先で生まれた子供で、母親を知らない。父親のロバート・セクストンは王立大学の教授で、長い休暇旅行から王都に戻つたとき、赤ん坊のルークを荷物と一緒に連れ帰つたのだ。

セクストン教授は学者として高く評価されていたが、ときおり突拍子もない行動で周囲を驚かすことがあつた。ルークを連れ帰つたときもそうで、母親について人々に聞かれても自分の子だと言えばかり。

人々はあれこれ噂したが、父は説教の目などものともしなかつた。ルークが乳飲み子のあいだこそ乳母の手を借りたが、そのころもルークのゆりかごは父の書斎におかれていた。

乳飲み子のころからルークは天使のように可愛らしく美しかつたが、子守歌は難解な学術書を読み上げる父の声だつた。当時の大学は学生が教授を訪ねて講義を受ける形式で、ルークは指導学生の「いないないばあ」にキャッキャと笑いながら成長した。

ルークのおもちゃは書き損じの紙や鳥の羽（いすれ羽ペンになるもの）で、物心ついたころには王立図書館の中庭で遊んでいた。教員の住居は王立図書館と隣りあつており、小さな門をくぐれば中庭に入れたのである。

当時の王立図書館の館長と副館長も、赤子のころからルークを知つていた。ちなみに、この二人はラツセルとルークの前任者で、館長はラツセルの大叔父である。

天使のような赤ん坊はすくすく育ち、やがて人の目を見張らせる美少年になつた。しかし、館長も副館長も教授である父も、学問の成果を出すために必死な学生たちも、ルークの聰明さを心から愛したのとは対照的に、ルークの容姿に特段の関心を示さなかつた。

ルークは大学付属の幼年学校に通い、中等部へ進学した。そのころにはルークの遊び場は王立図書館の中庭から図書館そのものになつていた。

ルークの環境が少々変わつたのは、高等部へ進学する目前のことである。父のロバートが急死したのだ。真夜中、書斎の書類棚にかけられた梯子の上で発作を起こし、転がり落ちて帰らぬ人となつた。

学生たちに愛された教授が亡くなつたあとルークの後見人になつたのは、王立図書館の副館長である。ルークは高等部の学寮に入つたが、週末は当時の副館長が暮らしていた、図書館職員の官舎で過ごした。

官舎は王立図書館の敷地内にあつたから、いまやルークは図書館に行くために門をくぐる必要もなくなつた。大学では書誌学を専攻し、官吏の試験を優秀な成績で突破して、図書館職員になつたあとは副館長の補佐を務めた。

つまりルーク・セクストンは自他ともに認める「図書館の子」だつた。このまま年をとればやがて「図書館の主」と呼ばれたであらう。ちなみに職員の一部は、彼をひそかに「図書館のいとし子」と呼んでいる。

大学を出てからもルークは図書館の敷地内にある官舎で一人暮らしを続けている。毎日の仕事を終えると職員用食堂で簡単な夕食をすませ、そのあとは書庫にこもつて調べものや読書にふけるのが常だつた。官舎に戻るのは夜も遅くなつてから。朝の寝起きはよいとはいえず、ぼうとしたまま身支度をすませ、朝食は官舎の出口で売つているドーナツとコーヒーを執務室に持ちこんですませる、といった具合である。

普通ならこのような生活スタイルは周囲にわびしいと思われるものだが、ルークの場合はそうならなかつた。執務室でドーナツを頬張る姿もさまになるのは、常人ならざる美貌の持ち主ならではである。

副館長になつてからもルークの生活が変わることはなかつた。ひとつ特筆すべきことがあるなら、

館長に就任したラッセルの誘いをすべて断つたことくらいか。

以上がドラゴンを飼いはじめる前のルークの人生だった。しかし、ドラゴンのリリによって、その毎日は劇的な変化をとげたのだつた。

## 6 ルークとリリのていねいな暮らし

やつと夜が明けたころ、サラサラ、パタパタという音を聞いてルークは目覚める。以前は目覚まし時計を三つ鳴らしても出勤時刻ぎりぎりまで眠りこんでいたものだが、今はドラゴンのリリがルークの目覚ましなのだ。ドラゴンの翼がこすれあつたり、鉤爪が籠の底をひつかいたりする音を聞くと、なぜかルークの目はぱちりと開く。

「おはよう、リリ」

サブスクにセットされているドラゴンの籠（睡眠用）は、執務室にぶら下げている日中用の籠よりも頑丈なつくりで、まったく優雅さがない。寝る前にかけたカバーを外すとリリは檻に入れられているように見えるので、ルークはこの籠が好きになれなかつた。

ひよつとしたらリリも同じ思いなのかもしれない。

ルークが籠の戸を開けたとたん、リリはルークの胸のあたりに飛んできて、それから肩によじのぼる。身支度をはじめたルークの首筋に頭をスリスリするが、顔を洗う水がかかりそうになると、

パツと飛び立つ。

「朝ごはんの用意をしようか」

ルークは身支度をすませると、官舎の入口に届けられた朝食セットを取りに行く。これは〈竜のヤドリギ〉のサブスクオプションで、新鮮な卵とミルクと焼きたてパンが毎朝届くのだ。少々割高ではあるが、これまで食事のほとんどを勤務先の食堂ですませてきたルークには便利なサービスだつた。

リリは新鮮な卵にはやくも興奮している。ルークは小さなキッチンへ行くと、フライパンをコンロにかけて目玉焼きを作りはじめた。卵の殻はリリの朝食になるので脇によけておく。

本当のことを言えば、ルークは目玉焼きよりもオムレツが好きだつた。ところが初日に挑戦したら、新鮮な鶏卵はルークがオムレツとして思い描いていたもの——ふんわりした黄色の半月で、割つた中身は半熟どろどろ——とはかけ離れた物体に変わつてしまつた。そこで翌日からは目玉焼きに取り組んでいる。こちらはなんとか目玉焼きのイメージに近いものになる。

ちなみに、リリはゆで卵の殻には見向きもない。  
目玉焼き、バターつきパン、ミルクと紅茶。

リリはとつぶくにテーブルに——ルークの席に向かいにいる。ルークが卵の殻を並べて「朝ごはんだ」と言うと、藍色の目の中で白い星がきらきら輝く。

ドラゴンを飼う前のルークは、こんな朝を想像できただろうか！  
朝食をすませると、ルークはリリを連れて官舎を出る。出勤時刻まで十分な余裕があるので、

ルークはリリと一緒に大学街を歩き回ってから、図書館の方へ行く。早朝の大学街はまだ人通りが少なく、空気はさわやかで、酔っぱらった学生もいない。

リリはルークを先導するように飛んでいき、ルークがこれまで足を踏み入れたことのなかつた路地にも入りこんでいく。リリはドラゴン特有の感覚で、木立に囲まれたベンチや朝露に濡れた花壇を見つけ出し、ルークはリリがデザートを舐めているあいだ、ベンチで一休みする。

ドラゴンをサブスクしてから、ルークの血色は少しよくなり、夜も以前より熟睡できるようになった。そんなルークの変化は、王立図書館を中心とした大学街の早朝にも影響を及ぼした。

「どうしたの、ずいぶん早起きじゃないの。試験前でもないのに」

「ははは、早起きはいいことがあるってやつとわかつたんです」

これは学寮近くのコーヒースタンドの前で交わされた会話である。コーヒーを片手に返事をしたのは、これまで試験前でもぎりぎりで講義室に駆けこんでいた学生だ。

「ルークさん見物ならそっちじゃない、あっちを通るよ」

視線が定まらない学生にコーヒースタンドの亭主はあっさり教えた。同様の学生が何人もコーヒーを買っていったからだ。

「ちょ、ちょっとここにいていいですか？」

「いいけど、次の客が来るまでだ。客が来たらあっちへ行きなさい」

学生は指さされた方向を見た。街路樹の陰に数人が固まつて立っている。

「まさか彼らも？」

コーヒースタンドの亭主は満面の笑みで答えた。

「ルークさんがドラゴンを飼つてからというもの、客が増えてな。ありがたいありがたい」

なんということだ。学生がそう思ったのも一瞬のことだつた。誰かが「あつ」と小さく叫んだからだ。

「来た！」

「リリちゃんが見えた！」

「はいはい、次の客だ。あんたもあっちへ行つて」

亭主は学生へ<sup>おうよう</sup>鷹揚に手を振りながら、やはり街路の先へ目を凝らした。パタパタと宙を飛ぶドラゴンの下でルークの黒髪がなびいている。あいかわらず誰が見ても美しい男だが、ドラゴンを連れた今はさらに神秘的なオーラが加わっている。

亭主は内心ほくそえんだ。ドラゴンと散歩するルークをひと目見ようと、これまで遅刻ぎりぎりだつた学生や職員は早起きするようになり、コーヒースタンドも繁盛しているからだ。

晴れた昼休みには、ルークはリリと一緒に中庭で日光浴をした。その姿は勉強や調べものに疲れた図書館利用者の目を和ませたこともあり、これまで試験前以外は図書館に近寄らなかつた学生も足を運ぶようになった。

一日の仕事が終わると、ルークはリリとともに官舎へ帰つていく。職員用食堂はリリと一緒に入

れないので、大学街の惣菜屋で夕食を買って帰るのが日課になつた。つまり運のいい者は、早朝だけではなく夕方も、大学街でドラゴンを連れたルークを目撃できるのだ。

夜、ルークが眠るときには、リリはカバーをかけた籠に入れられる。〈竜のヤドリギ〉のマニュアルは、夜中にドラゴンを部屋に放すことを禁じていた。しばらくのあいだ籠からは羽根がこするサラサラ、パタパタという音や、鉤爪でひっかく音が響いているが、やがて静かになる。ルークがカバーをめくつてみると、リリは首をまるめてびくりとも動かない。

眠つてもリリは可愛いらしかつた。ドラゴンも夢を見るのだろうか。

そして夜明けが来ると、リリが羽根をパタパタしてルークを起こし、また同じような一日がはじまる。同じような、といつても、リリと一緒に暮らしさは確実にルークの生活の質を上げていた。

それにも、こんなにもドラゴンにのめりこんでしまうとは。  
〈竜のヤドリギ〉に足を踏み入れる前はまつたく予想しなかつたことである。しかし今あらためて考へると、あの店でリリと目を合わせた瞬間、ルークはずつと前に失くして忘れていたものを見つけ出したような、奇妙な衝撃を受けたのだった。

そういえばリリという名前も、ルークが考えたというより、リリの藍色の目をみつめているあいだに自然に思い浮かんできたのではなかつたか。

〈竜のヤドリギ〉のマニュアルには、ドラゴンに名前をつけても意味がない、と書いてある。店主はその理由として、精霊族のドラゴンは人間がつけた名前など覚えないし、反応もしないと言つたのだが、ルークにはとても信じられなかつた。

ルークが〈竜のヤドリギ〉からリリを連れ帰つたのは秋の初めのことである。街路樹の緑はまだ鮮やかで、汗ばむような暑い日もあつた。毎朝リリと一緒に散歩するうちに、ルークは日一日と季節がうつるのを肌で感じられるようになつてきた。図書館にこもりきりの日常ではありえなかつたことである。

コーヒースタンドの亭主をはじめとした大学街や図書館の人々は、ルークとリリの邪魔をしないよう、遠くからそつと愛でていた。こうして、ルークがドラゴンのサブスクをはじめてから、王立図書館や大学街の人々は——たいていの人は——幸せになつた。

## 1 王の末息子、ラッセルの憂鬱

アルドレイク王国の王立図書館には、本以外を目当てとする人間も訪れる。

「セクストン副館長、やっとお会いできて嬉しい。ずっと会いたかったのにこれまで機会を作れなかつた」

館長室に入ってきたルークにテレンス公爵夫人クララが言つた。まるで男子学生のような言葉遣いだが、見た目は美しいドレス姿の貴婦人だ。レースの扇で口元を隠し、同色のレースを重ねた豪華なドレスをまとっている。

ラッセルは館長のデスクの前に立ち、内心の落ちつかなさを隠して二人の対面を見守っていた。クララは現王の最初の王女、つまりラッセルの姉である。ラッセルにとつてクララは決して頭の上がらない姉だった。ちなみに、夫のテレンス公爵も同様と聞いている。

「こちらこそ、お会いできて光榮に存じます」

ルークは緊張しているのか、クララに対する表情は強張つてぎこちない。しかし、それも彼の美貌を損なうことではなく、むしろ神秘的な雰囲気を醸し出している。

ラッセルは無意識にみどっていた自分にハツとして、あわてて顔をひきしめた。

「大叔父は学者肌だったからなんの違和感もなかつたが、弟は迷惑をかけているのではないか？」王の末子が館長になる決まりといつても、ラッセルはどうやらかといえば——」

クララは眉をひそめて言葉を探した。

「そう、筋肉で考えるたぐいの人間だからな」

「姉上！」

ラッセルは思わず声をあげたが、ルークの顔はぴくりとも動かなかつたし、ラッセルの方を見ようともしない。しかし意外にも、その後ルークの口から出たのは褒め言葉だった。少なくともラッセルはそう受け取つた。

「いいえ、そんなことはありません。館長の決断力や外向的な対応にいつも感心しています」

ルークの返事にクララはほう、という表情になつた。

「筋肉で考える人間は決断が早かつたりするからな」「なるほど、そういうことでしようか」

——いや、特に褒められたわけではなさそうである。

「姉上——」

ラッセルは口を挟もうとしたが、クララは気づかなかつたように話を続けている。

「ラッセルは子供のころから何かを決めて実行するのだけは早いんだ」

「優柔不断では館長は務まりませんから、その点は適任といえます」

「それはよかつた。要するにあいつは体の方が先に動く性質なさ」

ラッセルは会話に加わるのをあきらめた。昔からこの姉の話にうまく割りこめた試しがない上、クララの相手はルークである。

「ところでルーク、と呼んでもいいだろうか」

クララは優雅な仕草で扇をくるりと回した。

「はい、もちろん」

「王立図書館の館長は基本的に終身職だ。前の館長は高齢で退いたが、私やラッセルには叔父にあたる方だからな」

「はい。前館長には私もお世話をなっています。前副館長の補佐時代には時々お会いしました」

「ああ。この図書館では、歴代の副館長は館長とつねに仲良く職務に取り組んできたものだ。まあ今回は不束者<sup>ふつか</sup>の弟でまことに申し訳ないが、よろしく頼む。アルドレイク王国の図書館は我が国が古代帝国から継承した伝統で、財産でもあるからな」

クララの言葉を聞くうちにルークの表情が少し和らいだ。その眸にクララの真剣な表情が映る。

「ええ、父からも同じ話を聞いています」

「ロバート・セクストン教授だろう」

「ご存知なのですね」

「もちろん、若いころ一度だけ王領の近くでお会いしたこともある。休暇でのあたりに来られて

いたんだ。お茶に招いて学説を拝聴したよ。古代帝国が分裂する中、アルドレイク王国の祖が精霊族の加護を得た理由についての話だった」

ルークは意外そうな目つきになつた。

「父にそのような学説が？ 知りませんでした。どんな内容でしょうか？」

クララは扇を揺らし、小さく肩をすくめた。

「悪いな、詳しい話は忘れてしまつた。ただ教授の話を聞いて、王家に伝わるドラゴンの逸話に納得したことは覚えているんだ。ドラゴンといえば、ルークもドラゴンを飼いはじめたと聞いたが？」

「姉上」

今度こそラッセルは口を挟んだ。

「副館長と話せて嬉しいのはわかるが、彼は忙しいんだ。俺も忙しい。姉上にドラゴンを見せる暇も、散歩につきあう暇もない」

クララはラッセルがそこにいることに初めて気づいたような顔をした。もちろんわざとである。「何を言つて。おまえのドラゴンじゃないせに」

「ああ、副館長のドラゴンだ。しかし、副館長のドラゴンは図書館のドラゴンも同然だから、館長の俺にも口出しする権利はある」

「弟よ、堂々と詭弁<sup>きべん</sup>を吐くな」

「姉上、詭弁は堂々と弄するものだ」

微妙な空気が漂つたそのとき、館長室のドアがこんこん、とノックされた。

「ご来客中に申し訳ありません。そちらに副館長はいらっしゃいますか？」

ルークがくるりと背中を向けてドアの方へ行った。呼びに来た職員に耳打ちされて、またラッセルの方を向く。

一瞬びたりと視線が合った。青い月夜の色をした眸を正面から見てしまい、ラッセルは心臓を驚撃にされた気分になつた。そして二人は同時に視線をそらした。

「申し訳ありません」

先に立ち直つたのはルークだった。  
「至急の用事ができましたのでこれで失礼いたします。公爵夫人、またお目にかかる機会がありますから何卒よろしくお願ひいたします」

クララは魔揚に扇を振つた。

「いや、ありがとうございます。今日は話せて嬉しかつた」

ルークは一礼して館長室を出ていった。ドアが閉まつたとたん、クララの持つていた扇がデスクへ飛んでいき、ラッセルはあわててそれを受けとめた。

クララはわざとらしく両手を広げてあきれ顔をしている。およそ貴婦人らしからぬ仕草である。  
「噂通り凄まじい美人だな！ しかしおまえたち、どうしてもつと近寄らない。大叔父上と前の副館長はいつもべつたりくつづいていたと聞くぞ！ 膝に乗りそうな雰囲気だつたと」

いつたい何を言つているのかと、ラッセルは小さなため息をついた。

「姉上、昼間からそういう冗談はよしてくれ。それに大叔父上どちらがって、俺とルークは恋人でも伴侶でもない」

クララはきよとんとした目つきになつた。

「え？ ちがうのか？」

「……当たり前だろう。だいたい歴代の館長と副館長はつねに仲良くやつてきたつて、あれはなんだ」

「そういうものだからだ。王家の伝統だぞ。おまえたちは絶対にうまくいく」

「は？」

「いやいや、まさか。かつて学寮仲間に仕掛けられた悪ふざけの顛末がラッセルの脳裏をよぎつたが、クララにそれがわかるはずもない。

「しつかりしろ、王の末息子」

クララはラッセルの複雑な胸のうちにまるでかまわず、無慈悲に弟を叱咤した。

「彼は図書館の申し子と呼ばれているそうじやないか」

「ちがう、いとし子だ」

「似たようなものだ。筋肉頬みのおまえにあれ以上の相手は望めない。おまえだつてそう思つているんだろう？」

「姉上」

「やはり来てよかつた。おまえに縁談は持ちこまないことにする」